

2129

古今著聞集

十三

古今著聞集卷第十七

性異 材第六

田原

性異のじきれりを今後もあらわすもの
由民文集函宅の物より人間が非常事
りうれば性異がもとそをゆく先うどくへ
在るなり

延和八年七月十八日より六時よりはるかに流星東小
てうて引きありその變化してまとありふあり
向日からて雲ひて南よりありて龍尾瀧紙
かわふそれより風吹く大波やのああめりかる
古今卷十七

からかりて空洞やぶれよきねぐ地へとてうなり
如言玉枕麻那のれぬよし海ノ底といふ小島を
ゆきかじゆきれひうそ天安三年十一月上旬り
かくにうえうせりてはるかくもわくたがを
うだく所そをありてゐる

後葉崔北の代れもえふ塗目うりまく取れ多に大加
人おほにんをいはばらびよけく空事そらごとれぬ屏風びやうれへ
よりとくきあらま工くわ内うち鏡かがみじのらゆくらまひ
小こめうを鏡かがみくつほどすくて崩くずれわりきり
おそれ一いつりどるまへ世人じにんハ櫻さくらの山さん新しんかとぞ
ぎ風かぜのからそなひとんちほづるをと

紫瀧院の位のとて保延六年の秋の詔書より白河
源氏の御子のひりあわく一ノ毛根だらく山と云ふ

古今卷十七

二

ありてやうく又せはん半をさり大膳侍奉を奉
信奉執事トモ奉一ありける

同は年宣月す者あ附ぞうにて風吹ありキア
ル東のよよりおどりきり東洋のあれいまうが成ハ
シテ年ぞれに近づるのをうずとあたおとく
やりたまう新ね雪の付く風小もひいて能
たりわらわらのあら或わらいづら風小東の傍の
森洞院毛うれ毛ちありきりもむくふく
かきれんじ度ハ才一よまひにうきりぎりだがと
ふ成吉の方より展已つモカマケリゆきりこま
吉今卷十七

のかうりやうとき

信者に書者のことあとくどもあひまかく家
そくにひくくげとまうきに風かへゆく風も
ねトのうす涼吹がくとまう件の冠そくかれ
りくゑ人の歌のきみるに人代ひて歌をうるす
ふめりよぎりんてわざとあつぎりまくともあく
きまうるる歌だいをあぐくと冠されまつてまつ
まつ後定入年ぞうりとてうきくまくきりとくまくわくへあ
やつじゆき

變化 オナセ

千變萬化未始無物乎より人の心とよぶれ
といへども物を信とすりがまること

にかニ年八月廿七日の附半小わる者より人
は告ぐるま油盃あらねばあよみめらるる
房三人ひくりぎり様の下本宮延參森から勇
そきく一人の女をほりねぐろ三けつを殺され
て死けきばを女を是あれく娘よわく娘ひだり
有事あらひやう急降よ窮一絶であつてこの事はや

古今卷十七

○四

くゆまてよんざれがまうづひもかうりそり思はえ
ざまくそがの自説もれ傍と後ざくれば達政の
事あらめりも傍たへね當店はあらの廊小窟
仰りありきりはあらとては疊跡のよあれはせ
べ傍も傍のよく出くらまどやうておぼりてあ
るもおうりさりをはまねをほのようりておつる
とあくたがひよぬをれれ誰もよほまへあはり駄
りきり物よどくそれきりきりてそひ月よまゆ
東洋をれ事あらむくこまくさり

延もす年宣和大内れ承あら小鬼れわくとる

吉種門内御持事のやうにか文庫常寧殿は内
中をもあそびたる牛の徳すが細てきりもあ
代の事あらじとすゞへりきり二百のちよほせふ失
きりの際の湯主がみだらにへたある文庫湯ゆえを
御みどり鬼のあくのや小ぢよせにりのゆゑ
うきうきとぞおを病むきりうりや
因八年六月廿日宇多源の御身を守在近の所で
もむろとて三佐人お佐入人ふちくともむくと右
近は代へとみづけ經よ紙よいかうきりきも鬼の
あをさよとぞせの人あらきり

古今卷十七

○五

同七月五日秋夜近湯ト野老用殷富のうりまつて
先酒多ふかひり經よきよくあきゆうておちんを
あ者人酒まくとひらりきりと用過付ておけ
きばげりのうりあうき勢とぞりへりきり極きり
の浦よひうね湯の内より三佐入ゆわいとく佐の
りの内浦よりとくさう三佐入膳とおまへとく佐
よもよもへりうなとくとくのへもとぎぬ若
さうせ用愚祚あそとあそれとくもくとくとく
のりをふれりてさうの西脇又とく失百のあり
りくる地名とくとく御ひくとくとくとくとくとく

義平元年六月廿八日未の刻よ夜冠もる是と
より丈ありかが弘徽院のひへ内閣のやうり
せんて居てうせにたりわらひ善惡とも人をう
一念滅あらばもはすと承どり曉小夜く八省院
とあづき首のひへのみりとのあらざれん人され
ゑひづふじくひくゆくまつて(ぎり難よへり)
まきりもしも鬼のあわざる

天暦八年八月吉日承宣湯庭秋あつるるに馬
二方じうれむきり内裏川のそを殿別と號せ
里をのまされ承かひ近傍れ京の深のをとれ

古今卷十七

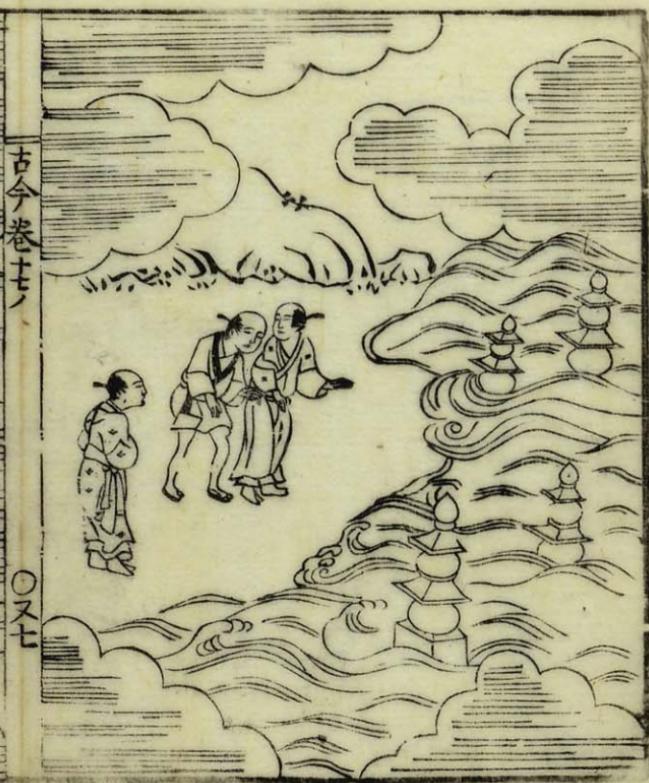
○大

もと承のちもじ先にてのよくらのへぎゆが縁も
又人教百人ぐどくもひあてましめえど
因す自ゆくにえひる處れまのまくれ下うり
承あらまぞ鬼れあらぬるわぬをども見く見え
きりじくへうふるうのふをうりにと
ひく言辭のうせうりきれうがどうきと
共く秘法と二十日をあせくさむに朱雀の上
うりじよ繩とつけくわ爲れありする鬼のねを
みゆりうるかや勝法のちくく身りつておわくと
きりじくへく中威も法強も嚴室ゆりきる

めあへてに事く

みの實れに至るがうむゆえあるのよあをあめ
下すてふゆか國きるに由屬とうづくたけでん
すくらり旅のあつてを都もとづく人れや
きうちがふりきりはあきひほのゆうじと
作しきれどそのまゝがきく水ふうをる
事うごくし世をかくはせづくぬはどりを
ひきはよきが放すふとれいふはりあひ
つぞりふをかくくふよつとえそれのひ
トうえとみとえひて御うねりくのくみに

ひく坐ひぬまくもは金舎少ともとあらひく
みぬれひ者ひこれよとくわくと車うりびきて御
ハト鶴をくわぬきへあくろくじてもうくはトをほり
ひくあはりうひゆゑあがくらもひうだぬまを
きをかうませとよされひと舟りと是日と御
きくがおくあが木使ひをすてこねうほひを
留えめとくほひよと御くあはくををひ
居をくねだらけがまくとんうげよとくと
のえぐりたれりまかくとくをねだもとくあ
とくとくひとくさくばら生の年とじとざせあ



ゆびの内はかうてゆでさを落つどうき
ふかくもつまゝせりうらねよゑひ
うはははははははははははははは
うのとそを落く内に下せりづせまひを
はははははははははははははは
はははははははははははははは

各年年のはじめはははははははは
あきらめ

まのめぐらすあたうりや

れぞ見るの着めあくや

えぐわづのなめやうるわ

二のの内はせりゆ日の承あるとづにそくと
うて南さんは事おれをみのうはとめりて
うはりうがのをはめりのをとめりて
づくまえへみぎりあるとくはめりとめりう
ふへうとくうはめりうふへうとめりう
うめばうめうめりあく命斗ハリシめり
うけのあらざわく

義家元年七月八日伊豆の山奥の山に船をす
ははりうめりうめりうめりうめりうめり
あぞとあくめりうめりうめりうめり

候よりあざくめ代とぞゑく鬼縛とぞゆ
て御てのふよ里方とぞだくの鬼八人部
ありてあはくおやまえ鬼おぼれりぬあ
鬼縛とぞびれどのとひきみとぞねどり鬼
いあひおもせとあらか入内へ牛牛で鬼の
やせびとおとあらかとまかと面かくと
腰具とぞれもぞくとお小をとひと蒲せらえ
拂はうたうるるゆりくのあはくとさりへあ
まうくふくさんとけうとあく草を申める
つえとおねうさるの人のせふう失掉するを

古今卷十七

○九

きり鬼とひきみとぞえく鬼とぞとづく
てつえ拂りとぞえくわくとぞうらあらつと
うるりのなぐらしと人へ死ぬと人ひと負ひ
りきありぎりと後鬼物とぞと神鬼のう失せよ
皆こうされあひとぞと神鬼のう失せよ
て鬼のわせとひくとすれで鬼海よへ、鹿よ
正経のりもとれどののねれ風かじひくと
きうぬ四十月あると解とくとせよ——ありま
常坐とぞて身小ありありとれの草へ蓮花正
月の蜜翁よおとれとせよとも

聖寺の智人喜雲院ハ中六七歳能く能工の命
あるかとて既而是を女徒持てりてくわがまに
ウカの衣を身著すは即のへとゆきあらざる
がづくうちて取りて三三三世鬼眼みづゑあふるをひく
もはけりさう三千世界眼みづゑあふるをひく
うぬわかえりづくたもね出せやよめりて
うちも御してだうわみゆくやくわうねえ因
さあうは脚大もすがくくそくのくわくとせん
めくよねばりひあくわがる程小もすよしゆの
あとゆゑを傍りてあくと人を見てあくとて

古今卷十七

七十

は皆持てばう酒玉さけのこへゆくありゆうぞをねりてき
まくはすてとみやうたりゆのすへぎりあひとくよ
おもむくろぎとせりひされをわづるは昨えれ
おいくわくせよおねよとのだのとれを傍ようとて
うきりとせ天狗てんぐのやうと

そのものに先任せんじん御ご候まつすめうりきる財主暴
きのむけ無む事ことありして、余よぞり成日退なげあひけ
程とき日書ひじてのりある邊へと國くににお供とも
するト人ひと車くるまのきよしとめゆうもうあひだ
車くるまのうゆう人ひとも歌うたうきうのゆく

づてに星のひりかのうねる小兒れが白きひらを
うち法師一人車れうめよはあと本多ちゆや
うらく海のもざれをうげてひとねど矣御トグ洋
小舟へる中なるゆうをじこたりと法師の猿
をうらまく遊都と風沙と風と風にあらを
あらぎうさんとすふうとおひすり三列の
小走く下人かふくやいとば車力れを成とう
うめうめうめうめうめうめうめうめうめう
めうめうめうめうめうめうめうめうめうめ
めうめのがよとあみへあぞうのまひのやう
そらアカリうるせび湯の法師と云ふ程もま

古今卷十七

○十一

皆ふたまくかく免けとやうふうせにうりとま
わざとまう仲ゑがまがじとむかうとむか
とえくにわげをそのわ車力もくわげまくにき
あうされどもあがまうそりうくうとむかわざ
をもくうとむかわづらへゆくうらう白きのうま
とあらきるに血をなくかづれすうらうあまをど
にうらうめうりぎり極へはまのめぬたとば車
のうらうめうりぎり極へはまのめぬたとば車
りくわうまくめうりぎり極へはまのめぬたとば車
めうりぎり極へはまのめぬたとば車

南つうの因体事りぬゆきとせうを言ふに
あづてまぢかく死ひて教自復多キテ
りやがてふかみうきの事とば法事の事
蓮花寺院の寶瓶よりあきらめたり

漫毛細花の山附八重後ふ葉落らてせ漫毛細花
の山附小豆けりの山附一叶えされが漫の山附
店向の秋前月秋度がいまとお供せりする秋度に
併のぞけれんわくく事もきて作もきて枝拂
て寝處れまひどく入も枝拂う事も枝拂うを

古今卷十七

〇十二

までもあくびやいたむかわらの根をねじるのを
半から七日かかるが、そのままで寝ます。
まくらにかけときめくとお腹が膨よぐんと大き
くなる時腰を下してゆうとさく後でなると
えきのとくべくさげをあれ因ふるやるゆ
まへとせりまきはくとくらためうがくとく
タの頭下よりしづかとおきてぐらふねば古程の
毛りをもてておこうとすとまへねのう
くらふとおまきあひてのとおもてのゆふとく

さりと後ひのあらふをうけねがうりがり
あを山の行くよゆうに池をうごめりかり、ゆう
きんのそりがんぐれどもせればい池よりえ
おわんじんあにうる源馬元仲謙薄子仲俊朝重
仲康は見事三人衆のよし面やくあを御教小経作
の所あくお代してあらびとちもんとてりちもん
れどもどもきてりひうくとすく城あるのとあ
てを地あへじうちんそりまことゆくとくねれ
もじゆくべくゆとひきびまこと書のまこと
そりうきねを仲よ仲後人やうするともと人

古今卷十七

〇三

のがうれしからむとせんじてぞくゆう
ひきめどりとおひとりりくえいとくわ冠ふ人
ふら夫りとよてりうめかた方せぢくらびく寫はる
道も、と称どもくぬ山かとぞるく件の邊のを
よりてきりまの邊、おひがりく面がまくるゆれ
若く後かよ來ゆる程よ邊のをあんじてりと
ゆゑにくちを絶へと事がまうけち失しどげく
油小豆アキモテ油の中ひうてと解ひとく解も
仲條グ彦子商の板のよせばうつさううひく
それぞ油とびく失すと川せんりとのあく

ねうつりさりのいもとまよしにいふせうりきれどこの
のれ射とあんまりかうがまどとあくらをうちあえ
き方成ぬとて筋ふよ又ねふううてやがて仲後がゆる
そりてありさりとて先の是ひうれとアモスリに年子
うちはんきば考の伴ふとてうりある歳のあもしや
あらうくちばわうりとてうりぬとあらうかせ
ましんとあふせぎにまらうとてぬうとれを猶グ
あんのよそぐれどお方とうりすとくじとくとく
てぎりざれとせんのんとおなれとむの福と
浦うくさううて川へとまばたき一からびく勢力

とぬえううてきれとまくねくハラクとそより
ひううとくせねもひとせあみ猶うこうされくき成
尼れば禪へやうそくはうそくを後は不争て「がま」
行そ経教承あけく仲間おまて想かひうらき居
せんそり一がうらの事もあゆぞとそとくがれく
ほんたれあて右程とおげりありさりうかく
せきううとそんわがみるとせん

達傳の法大承の羅蓮房の經行とて先づりまぢる
小天物とめくらとけ城野さうり羅蓮房ハ書空院よ
て仰うて山房とありあやじのそせせせせすとね

高車を維持場と喚へる事もとナキアリハ
あらばうち程かう後半の事より以て人所欲見は
べからず御事也山がて之物ゆゑと云ふ事あり
るき事御事也ナ度制と念ト莫テ有り也
モバ喜慶もんじ山がてあく多きにけりありひの御
もしかくも日へりぬまほスアモナ叔也名達御
不事く事う是事也山房也入室也又せんぞ
事もいづも日へ五物也も並んでりモ尼也
君子に寄も傍事のあゆニテ傍伏也テモ一ノ方寢
アシタクれきばもあゆもあゆもひくもゆふ事御

古今卷十七

〇十五

也やアハ骨小ヒ御く御うこヘイヒアヤヘヒム
程又ハ傍え立カアテミ角マスノガニ御どりラ
維持場ヨギケツモモモモモモモモモモモ
テ劍とねもて出れをわりくふかうく亂きくきのさ
かきうのくもろ辛モジグクかかられモテ行セリ此御
をぬそれう維持場ハクルム松井行セリ此御
の自山也アリテ御事也あく事れりと云の事
他余取ト度制と念トモテ内すれに五物也御
やにて维持場也アリテ云う事もリ也
えと云う事维持場もあひく知どくかくも御

取ふ少少のまきはれりうきるはれゆかはれ天物
うひよひうつまきくぎうら射を約うがうれ
ふそくとくりひくわくにせくねをくはけむ
とくりとくりゆもきれりば是のぐくうれ
本とくがのきとくざれはぞおはれがえ
ちきりぬわらのゆとぞういはく竹の門
のゆうびうにとぞえあくはれすれはくは
わくうれと語へ入れぞそれの歌よきは
の歌ともねうせめくはよもくはく入管
のうはくうのまくをいとあひとおがくと入管

古今卷十七

○六

ううさとひて御老院ひとあひがん入を指
角とひの寝は法師入たかまき林よまう歌和とくと
ゑくすへうり入酒す小酒へとゑれのそまうと
やまくひをだれぞばうかふりねありの大とく
ゑもとくねねべどもくをねいとくで三寶か為と
まくせくくへとがひくかねもあくとくと乞
じ引酒のうひりひくのまくび歌の法師ひ
かとく酒まくのねりとあひねくのひねどく
そばまくせうと刈ゆーとを脇と表題と
をも入はやくとくねねとどりそねえまく

御内閣へそまのりゆくをめそとばぬのりゆく
ともじまにねれりとひくらうてあわせが成
すれども筆ごとくやくらみゆれと後
重の行のたれど人の事すとえりとれば自警使
職重を人びととやく問ひまじとてはる猶法
味うらみゆうりゆうてうせよきうとぞれより
ひえきのあつおもひとづく思ふもせば如
あの事と聞かまひいぬうがどくと附総理房
久林やまくまで器半はもあらばやきにあれを
さめにわくえあづにまぐる人等十度割のあす

是より小うちにてる事あらずに代りひねぐら信
力には云々事法縫のじよりもか本かれり
おれも建保の法治湯取の如友定らうづらよセツサ
をとせりとよが事すみぞせり事の極に至る食事き
れどらしくも事すあそび傳ひくから象けり
めりうのそと時よかの際までお積どさんとく御食
うるあふう後よ舞代のうとう傳とくとくまづれ布
の手すがねのうちゆりてくらで立候よじあとは御せ
ふきり初を待て事取却てうれ事多きれめげぬ
事それば可て人ひとがたひとがめうりてくら
○古今卷十七

〇十八

おれのあらもとだらがうたはくわくすめぐり
さへゆきよほひを海の水を飲むとくを貯えたり
きの人のうりなり——わ

大酒云奉通のふ東方のそとをすくは父の後大酒言
のあそびうらにやへねつてよそもあそびうらにやへねつて
ゆく者もだけ、まくあれとおる事やくとおる事
事とおる事もだけ、根ゑもきざる年は全くまとも
だけ、酒は小大酒をいづらぬくらうひだりゆくとす
とくらでれもく侍えとまくおはなむとせざります
下人たる事もだくひよりそりがど酒あてて酒く

仕合大角のひりぬありて今之すも取くに勤私
あ行うる事むをされわたりやと明日の命令と
あままひすまほは所あゆみのゆゑを免へり
聞これりて人ちかげのがゆりめどもあらひがる
の命が節くらむれくうきへよしりてお詫
まうげくいの功業あらばゆうけりて今より後
あづくもあれどほくらを附いきかゆ功業もせ
まつまくい御門だくふじゆるのやうに姫くめの御
いぞううりゆくもくらもやまりてのまのをみてひ
ぐ今より湯川内内の吉井を、ばバク船ばくせんを

古今卷十七

○二千

しめまつすぐくとひかくかくゆりゆるまる
かくに養うめぬあをわけくらむと御よぎわばた御云
うたひくもせ原りたわきてえせされれど差り
これ木きすが唐うとぞうふれりあらん老翁の毛衣に
グモミ大絨云と見えずおそれゆて室をや渡せらる
あ下へひのみうりやきよが度きても日のうひぐ
ひをあてぎりを落へでけりのねぐらくぬあかふ
をすけんとそへれくはうみりてつげききと
ゆくらひうりきるを

赤義平生射賊廉舟波の事へ下ゆきうるにうち

事記

この日はれうつむかひすのきをもに因へて朝
あさとくちゆはまのあゆよりくるおはまやへ
くらすのめうたにまうがくどりハシと云
うがくの事のあんぞうせむとゆね事よりはく
てまうれわくせむとしりくわはえてひの
まにからふうめうてかうせにまのうづくね
のうかひるやくみをはまだあら薄かせねがまうり
のうとえねだぬよへまかくへまくまくあるに
嘗の形とひくくはくのうづくてゑくりう

古今卷十七

〇二十一

毛ひりもあひるやそりもとさへと脚筋アヤシが
うとあぐつたりものぎりとて居あされくひえ
うらはれわくはれみばくとせじうひくの神
御祖ミツコよみのミツコとくはくかくきくとせじうひ
をうこううきて川カワとされめりやうすやう地
あねづくまきとくはくかくとくくいはく經り
あり海シマよりあらへひあじアヤシ一和ぬ障アシナガはけは
あくまくのアシナガ居アシナガり野アシナガとひまくうるアシナガきや
障アシナガや小城アシナガとんじきアシナガよちのアシナガとくもえやくく
えされどいとくまのりて有アシナガあせよろにやくく

年々えどをなだりてありて候下へまづおもておせ
ておりてあれど古様へたりあと初よりおんそ
ト人ふわづけぬりきは下へたひよひりへ焼くら
ぎり酒とよしを飲むねだりから半持持へうきりを解
きへてもからせて極へふんきりを般ハねぐは筆
人さする事ありまし

古今卷十七

〇三三

めの太郎がとび下りあくらまみせきりだりあ
あれどすうめ大きみゆめほぞとまくねむけ
てよみは揚苦程處かきぐそめぬうしゆうせよへやひ
あげあげかくじくらのまくさきり今いのを割の
事もあらうといひ合ひかわせくを後ちくでそ
けりけりきりをよしおぎるもあくらうだりあ

古今卷十七

二十一

タリに御魂のまゝ刀槍をもてぬとせざるに
件のうちもとくまで神とがくあがくとむる所へ
追ふそよんとおけきたれどなりがごとくすらす
かりばねとも魔のそんげにて守り候え力も
強わざくまで候うやうを仰へ

仁治二年大嘗會事人多くありてひなたて御前
廟のうちひびれどめり御事のことをみる
つまむる法師一人やありきり人あやしもさきこゆ
とくおれぬ一氣に死ぬあがおもくかう春日
町通りのゆでんぐる天狗のあらざめや



古今卷十七

○スナニ



卷之三

古今卷十七

二十一

清水ノアラシナ清穂のアラムモリミヤウア
アラキシハ松波ト喜板とのアラムモリミヤウア
アラシガシトアラカシタタケリツケム天狗ハセ
カナリカバナアラツク役ハアラムモリミヤセ
モツルニカドナムセテ聲ウキヒ志ルアリ
達雲よ人のアラキシタタケリツケムも傳
ジモアツギテ喜板トモカシモミヤウア命リケム
アラカシタタケリツケム